慶應義塾 医学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160―8582
東京都新宿区信濃町35
電話(3353)1211 内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　武田　純三
毎月　１回20日発行

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●外来診療時間＝午前8時40分～午後12時 午後1時～午後4時（特殊外来）
●電話＝03（33353）1211（大代表）

大学病院エントランス棟完成に向けて

7年半におよぶ工事も1年後に完了

大学病院・信濃町キャンパス管財課　課長　前田　宗慎

2021年4月、1号館（新病院棟）新築工事は、いよいよゴールを迎えます。1号館建設地を確保するために始まった6号棟の解体工事が2013年11月に始まりましたから、工期は実に7年半におよびます。工期のみならず300億円を超える総事業費も慶應義塾始まって以来の大事業です。

今回は、完成までの今後一年間、どのような工事が行われ、信濃町がどのように変化するのか皆さんにお知らせしたいと思います。

これまで1号館は、2016年に1期棟が完成し、2018年に2期棟が完成した後、2号館の診療・入院施設整備期間中、工事を一時中断していました。そして2号館の主要部の整備完了を迎えた2020年10月、1号館3期工事が開始されました。3期工事では、古い建物の解体、エントランス棟の増築、歩道や駐車場などの外構整備が、以下のステップで行われます。

■ステップⅠ・Ⅱ
2020年10月1日～2021年3月
1号棟（東ウィング）、2号棟、中央棟、旧リハビリテーション棟の解体工事

■ステップⅢ
2021年4月～2021年7月21日
1号館のサブエントランスの増築工事、駐車場などの外構整備工事

■ステップⅣ
2021年7月22日～2021年9月
1号棟（南ウィング）の解体工事

■ステップⅤ
2021年10月～2022年4月20日
エントランス棟の増築工事、駐車場などの外構整備工事

現在は、ステップⅢに入っており、1号館1階の総合案内近にサブエントランスの増築と外構工事を始めています。このサブエントランスは、2021年7月21日に閉鎖される現在のメインエントランスに替わり、2022年4月20日までの約9か月間、病院のメインエントランスとして使用されます。病院の出入り口の位置が大きく変わりますので、病院利用者の方々が混乱しないよう、周知や案内の準備を行っています。

そして1号館新築工事が完了した2022年4月21日からは、3期で増築されたエントランス棟にメインエントランスが移ります。現在の病院エントランスから2号館側に20メートルほど西側に移ると思ってください。

また、エントランス棟の前には200台を超える駐車場とタクシー乗り場、車寄せができます。信濃町駅から病院に至る通路も広く、綺麗に整備され、今までとは全く違った新しい慶應大学病院の姿が見られることになります。楽しみにしてください。

最後に2号館での工事も簡単にお知らせします。2号館では、3階で教職員・学生などが食事などに利用できるラウンジ、8階で事務部門（総務課、人事課、経理課、管財課、学術研究支援課など）の整備工事を行っており、2021年11月以降、順次使用開始を予定しています。

工事完了まで残り1年となりました。これからも安心・安全を最優先に工事を進めてまいります。引き続き、ご理解とご協力をお願いいたします。

新築されるエントランス棟（パース）

新しくなる病院（パース）

新築工事前の様子（2013年11月）

現在の状況（2021年４月）

２号棟・中央棟解体（2021年１月）

解体跡整地中（2021年４月）

速報　新塾長に伊藤公平理工学部教授が選任

長谷山彰塾長の任期満了日5月27日を控え、選出規定による選考が行われ、4月26日に開かれた慶應義塾評議員会において新塾長として選任されました。新塾長の任期は、2021年5月28日から4年間となります。

長引くコロナ禍により大学運営が困難な状況にある中、新塾長にはポストコロナ時代の教育の在り方を示すことなども期待されます。

次号6月号では、新たに選任される常任理事など、新体制についてお知らせします。

【新塾長の略歴】
伊藤公平（いとう・こうへい）　1965年生まれ。55歳。
Ph.D.（Engineering）。1989年慶應義塾大学理工学部卒業。1994年米・カリフォルニア大学バークレー校Ph.D.（博士）課程修了。慶應義塾大学理工学部助手、助教授を経て、2007年理工学部教授に就任。2017年4月～2019年3月理工学部長・理工学研究科委員長。JSTさきがけ研究領域「量子の状態制御と機能化」領域総括、文科省Q-LEAP量子コンピュータ分野、プログラムディレクタなども務める。専門は固体物理、量子コンピュータ、電子材料、ナノテクノロジー、半導体同位体工学。

International Academy of Pathology（国際病理アカデミー）President に就任して

日本鋼管病院病理診断科部長、慶應義塾大学医学部客員教授、東海大学名誉教授　長村　義之（49回）

2020年12月第32回国際病理アカデミー（IAP）国際会議の閉会式で引継ぎ式があり、私は正式に President（理事長）に就任しました。2016年に就任した国際細胞学会（IAC）の理事長に引き続いて、病理学の国際的な最高の立場を拝命したことは、大変に名誉なことと思っています。

ご存じのように病理学は近年、ゲノム解析が導入され、形態学にはデジタル画像によるオンライン化がなされ、国際的に共有する情報が急速に増加しており、ボーダーレスの医療としてまた科学として一層の発展を享受しています。このような状況で、国際病理アカデミーの理事長に就任することはこの上ない光栄であり、〝病理学の教育、発展〟を活動の目標とするIAPの President としての重責を果たしたいと思っています。

国際病理アカデミー（IAP）は、1906年にカナダ、アメリカの協力で創設され、現在は世界中に54の支部、総会員数2万人（主として病理医）を擁するグローバルな組織となっています。IAPは病理学を科学的に進化させ、普及させる病理学の頂点に位置する国際団体であり、Presidentは学問的実績のみならず行政力、近未来の方向性などが評価され、選挙で選ばれます。得てして欧米優位となりがちな組織でアジアからの理事長の就任となったことを深く感謝し肝に銘じています。また、先日COVID-19パンデミックによりWeb開催となったIAP国際会議も116か国から4760の参加登録があり、次世代の学会開催形式を示唆するほどの大盛会でありました。

思い起こせば50余年前に医学部在学中に「病理学に進む」そして「米国へ行く」を決心して邁進していました。卒業した年の1970年6月22日に〝夢に胸躍らせながら〟羽田空港から飛び立ったのをつい昨日のことのように思い出します。滞在したコロラド大学メディカルセンター、ヘンリーフォード病院では、いろいろな人と出会い、病理診断・研究につき実に多くを学び私の〝成長期〟を過ごしました。その時、病理学の国際組織のトップになれるとは夢にも思いませんでした。在学中に米国行きを考えてから、講義のノートは英語で取り、答案も英語で答えていました。更に口頭試問（中には難関もあった）も英語で答えました。当時、このような私に〝合格点〟を下さった先生方に深く感謝しています。この自由さを許容する塾の校風がなければ今の私はいなかったと思います。また、病理学に一生続くような興味を持たせてくださり、自己の専門分野で、世界に通用する〝一芸に秀でる〟ことの重要さを教えてくださった先輩諸氏にも深く感謝しています。

最後に、今の若い諸君達には、内向きにならずに世界に目を向けて欲しいと思います。そして国内の学会も真の国際交流を求めて行くことを期待致します。

今後ともどうぞ宜しくご支援の程お願い致します。

IAP Presidentに引き継がれるGavel小槌（上）とPresidential Pin（右）

予防医療センターが森ビル「虎ノ門・麻布台プロジェクト」へ拡張移転

「ヒルズ未来予防医療・ウェルネス共同研究講座」の開講も

慶應義塾と森ビル株式会社は、2023年秋に開業を予定する「虎ノ門・麻布台地区第一種市街地再開発事業（虎ノ門・麻布台プロジェクト）」において、慶應義塾大学病院予防医療センター（以下「予防医療センター」）が信濃町地区から拡張移転すること、および「ヒルズ未来予防医療・ウェルネス共同研究講座（以下「共同研究講座」）」を開講することに関する基本協定を締結した。

2012年8月に開設された予防医療センター・人間ドックは、受診者に高い評価を得て、高いリピート率と稼働率で運営されてきたが、一方ドックの予約が取りにくい状況が続いており拡張が望まれていた。また受診者の健康管理に関するニーズが年々多様化してきており、これに対応すべく個別化健診プログラムの開発の必要性が生じていた。この状況下で森ビルから新しい街づくりの中核施設である「虎ノ門・麻布台プロジェクト」への予防医療センターの誘致があり、本プロジェクトへの拡張移転の検討が行われていた。

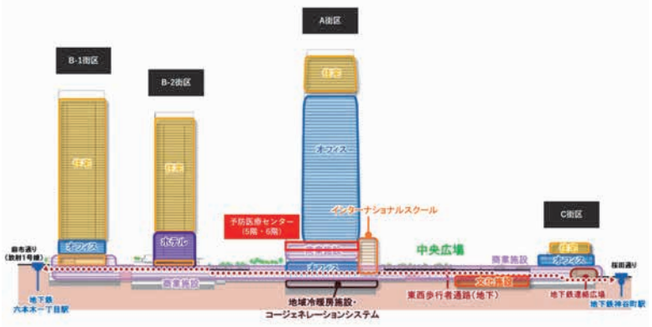
この基本協定締結により、高精度な検査機器と高度な診断技術に基づいて行われてきた予防医療センター・人間ドックを「虎ノ門・麻布台プロジェクト」においても継続することと、さらに先進的な新しい検査システムを導入することにより、従来の人間ドックとは異なる独創的な健康サポートプログラムを開発し、受診者のニーズに応じた個別化予防医療の展開を目指す。また本院の各診療科・診療部門との連携を一層強化することにより、ドックで発見された疾患の最速・最適な治療へ繋げる。

また、2021年4月より、慶應義塾と森ビルによる共同研究講座を設置することで、森ビルが管理・運営する実際の「街（ヒルズ）」を場とした研究活動を開始し、予防医療センターとともに予防医療のさらなる発展に向けて、研究成果に基づく新たな予防医療・ウェルネスサービスの社会実装と、新しい形の産学協働の推進力となる人材の育成を目指す。未来予防医療「ウェルネス・ウェルビーイングにつながる働き方」「ダイバースヘルス（多様性に対応する健康医療）」をキーワードに、（1）個別化予防医療を実現する最先端の健康診断・健康支援に関する研究、（2）ウェルネス・ウェルビーイングを実現する働き方、経営ならびにオフィス・街区の環境に関する研究、（3）これらを実現するデジタルプラットフォームとデータ技術に関する研究を統合的に推進することであり、予防医療センターとの協働により質の高い未来の予防医療サービスを研究開発していく。

高齢化社会における「健康寿命の延伸」への期待がいっそう高まる中、すべての人々が生涯にわたって健康な生活を送ることができる豊かな社会を目指して、常に予防医療の最新形を追求し続けていきたい。

（予防医療センター　高石官均　69回）

新しい虎ノ門・麻布台エリアのイメージ



第90回北里記念式の中止について

例年６月12日に開催しております北里記念式ですが、新型コロナウイルス感染症の影響拡大を受けて、今年は中止とさせていただきます。

なお、三四会賞（北里賞・北島賞）の受賞者については、三四会のウェブサイトにおいてお知らせいたします。

鑑賞知来

慶應義塾大学医学部教授会は各部門の教授と准教授合計121名から構成され、新メンバーは初回参加の際、会の冒頭で挨拶をする。私も2021年4月から職位変更となり、改めて挨拶をさせていただいたが、同時に挨拶した新メンバー5名のうち4名が女性であった。これは自らの経験に照らし合わせると画期的なことである。私が初めて教授会に参加したのは准教授となった2007年で、そのときも冒頭挨拶をしたが、少なくともそのときの出席者には誰一人女性はいなかった。

世界経済フォーラムが発表している「ジェンダーギャップ指数2021」によると、調査対象の156カ国のうち日本は120位で、主要7カ国（G7）、東アジア・太平洋地域で圧倒的な最下位である。低評価の原因は国会議員、経営管理職、教授・専門職等、社会のリーダーシップを発揮すべき分野の男女格差のためだという。

さて、ご承知のように日本の医療は医師の長時間労働によって支えられてきた。しかし今、社会環境は変化し、諸問題を抱えながらも医師の働き方改革が行われている。また、男女の役割分担を含む日本の伝統的価値観は、ダイバーシティーの容認とは相反する側面をもつが、若い世代を中心として個人の価値観も変わり、多様化している。

種の起源で知られるロバート・ダーウィン博士は〝It is not the strongest of the species that survives, nor the most intelligent that survives. It is the one that is most adaptable to change.〟との言葉を残している。私の所属する眼科学教室の入局者の男女比はここ数年1：1である。運営実務的には問題山積であるが、なんとかこの時流に乗り、よりよい協生環境を構築していきたいと思う。教室の生き残りがかかっているのだから。

（眼科学教室　根岸　一乃　67回）